《新刊紹介》

森野繁夫
佐藤利行　著

王羲之の書翰

王羲之は六朝時代、晋の人である。書の大家として名高い。また政治家としてもすぐれていたことが中国の歴史書に記されている。その王羲之の書翰が六百数十篇現代にまで伝えられている。それは難解をもって知られていた。それらの書翰が、このたび森野繁夫先生・佐藤利行氏のお二人によって丁寧に日本語訳され、刊行された。

本書は、主に、伝えられている諸本の校勘を綿密に行い定本を決定したのち、難解語句や不明な事項について可能なかぎりの解明を試み、それをふまえて解釈を行ったうえで、一冊の著書としてまとめられている。また巻末には、参考資料として詳細な年譜や精細な系図が付されており、読者の内容理解を助けるうえで大きな力となっている。

内容についていえば、不思議なことに書に関する手紙はほとんどなく、知人や親族の死を悼んだものから、民衆への配慮を示しているもの、政治に関するもの、それに清談についてのものなど多岐にわたっており、王羲之の清廉・高潔で暖かい人柄が偲ばれるものが数多い。また薬品や薬草についての音信が多いのも興味深い。

さらに研究上の成果として、六朝時代の口語や書翰用語についての解明のメスが加えられたことは意義深いことといえる。

（A5判、二六〇ページ、昭和六十年十二月二十五日、第一学習社刊、三、〇〇〇円）

（植山　俊宏）